

歌舞伎の立役と女形との歩行動作における表現差 Walking Movements of *Onnagata* (female-role) and *Tachiyaku* (male role) in *Kabuki*

坪井 駿門[†], 古山 宣洋[†]
Shunto Tsuboi, Nobuhiro Furuyama

[†]早稲田大学
Waseda University

概要

本研究では、歌舞伎の女形の女らしさほどのように演出しているのかを現役歌舞伎役者1名を実験対象者としてモーションキャプチャとインタビューを用いて実験を行った。実験結果を分析したところ、インタビューで得た演技の意識と近い動作がモーションキャプチャでも得られ、インタビューで言及された基本姿勢、「振り」、「内股」のそれぞれについて仮説を形成した。

キーワード：表現行為、ジェンダー、古典芸能

1. はじめに

本研究は、歌舞伎における女形と立役の歩行動作を対象に、女性性と男性性の演じ分けを明らかにすることを目的とする。斎藤(1986)が歌舞伎について指摘する身体のねじりや役の種類による差異、宇津木(2019)が歌舞伎と関連の深い日本舞踊について指摘する演技と言語化された表現の不一致に着目し、歌舞伎において両側面からの研究がない点を踏まえ、女形と立役について共通する動作である歩行動作について実演による定量データとインタビューによる定性的データを併せて取得することで、仮説形成を目指す。

2. 方法

対象者：6年以上の実技経験を持つ歌舞伎役者1名を募ったところ、機縁法により1名の対象者が得られた。対象者は、18歳にて国立劇場歌舞伎俳優研修を修了し、以降20年以上の実務経験を持つ現役の歌舞伎俳優であった。

演技動作遂行時の身体各部のモーションキャプチャデータ、インタビューデータを取得した。計測には、光学式の動作計測装置(Opti track Flex3, Natural Point社)16台を用いて計測した。なお、演技動作遂行中は、三脚とカムコーダ(HDR-CX470, SONY社)を用いて映像データ(音声を含む)を取得し、得られた映像データからインタビューデータを取得した。

歩行空間は実験室内に敷かれた、約3.5m×約1.0mの

リノリウムマット(以下、マット)上とし、モーションキャプチャのx軸をマットの短辺と並行な軸、y軸を鉛直方向、z軸をマットの長辺と並行な軸とした。また、2次元的には、xy平面、yz平面、xz平面を用いた。データ取得は以下の手続きで行った。

1. 実験概要の説明およびインフォームドコンセントへの署名。
2. 対象者への反射マーカの装着。この際、反射マーカは頭部3点・C7・両肩峰・胸骨柄・剣状突起・手関節(両尺骨茎状突起)・肘関節(両尺骨茎状突起)・仙骨・両腸骨稜・両大転子・両膝関節外側・両外踝・両母指球の23点に装着した。
3. モーションキャプチャを用いて実演でのデータ取得を行った。対象者にはマットの長辺に沿って真ん中を歩行させた。この際、役者の役は立役・女形の各類型を指定して動作を測定した。
4. データ取得と並行して対象者に対して、インタビューを行った。

データ取得は、本手順の3と4を順番前後もしながら繰り返し、全体で4時間程度行った。

インタビューの際には、斎藤(1986)と宇津木(2019)に基づき、身体のねじりや腰の高さの安定、役の種類による演じ分けについての意識の違いなどを基本的な質問事項としつつ、会話の流れの中でその他の立役・女形に関する言及を求めた。特に、演技に関する言及の際には、動作の身体部位への意識と観客から見た印象の双方について質問を行った。本研究では、分析の際に用いる尺度として、反射マーカの位置、反射マーカ間の距離、角度を扱う。

また、以降で扱う歩行データは、歩行の一步目を踏み出した瞬間から歩行動作が終了するまでの約5秒の区間を分析対象としている。

3. 結果

3-1 結果の概要

実験結果として、女形については類型として町人女性、姫、田舎娘、老婆の動作データを取得した。同様に、立役については、町人男性、侍、老爺の動作データを取得した。インタビューでは、基本姿勢や「振り」、「内股」に関する言及が見られた。

3-2 インタビュー結果

インタビュー結果のうち、演技に関する言及を「操作」「効果」「印象」の3つに分類した。「操作」とは、「内股をキープする」など、直接的な演技動作に関する言及を指し、「効果」とは、「歩幅が狭くなる」など、「操作」による演技動作で得られた身体部位の変化に関する言及を指し、「印象」は「可愛い着物を着た女性らしく見える」など、「効果」によって得られた身体部位の変化による観客の心理変化を想定した言及であると定義した。

インタビューの説明の中で特にポイントとして強調された、基本姿勢、「振り」、「内股」に着目した。ここで、基本姿勢とは、歩行動作を行う際も維持される動作である。基本姿勢、「振り」、「内股」の3つについてインタビューデータを整理したものが、表1~3である。ここで、表について、「言及なし」とした箇所については、女形の動作に関しては前提として「女性らしく見える」という「印象」が含意されていることに注意する必要がある、言及がないものの含意されていると考えられるものについては、表内に括弧で表している。

註) ー の場合は言及無しを意味する

表1: 演技の基本姿勢に関するインタビュー結果

	操作	効果	印象
共通	前を向いて胸を張る	ー	(女性らしく見える)
	背筋を伸ばす	ー	(女性らしく見える)
女形	肩甲骨を後ろに寄せる	ー	(女性らしく見える)
	(肩を下げる)	撫で肩にする	(女性らしく見える)
	胸も張る	上が膨らみになる	(女性らしく見える)
	腰を落とす	ー	(女性らしく見える)
	半身にする	ー	体を細く見せる

表2: 振りに関するインタビュー結果

	操作	効果	印象
女形	少し振る	顔が見える	いかにもシャナリシャナリとしているように見える
(一般的)	振りすぎる	ー	品がなくなる 行儀が悪い
女形 (若い)	斜めに振る	ー	可愛く見える
立役	あまり斜めに振らない	ー	男っぽく見える
	真横を向いて歩く	ー	あまり色気がなく見える

表3: 内股に関するインタビュー結果

	操作	効果	印象
女形	内股をキープする	歩幅が狭くなる	可愛い着物を着た女性の動きらしく見える
	膝頭が離れない	ー	ー

3-3 モーションキャプチャデータの分析方法

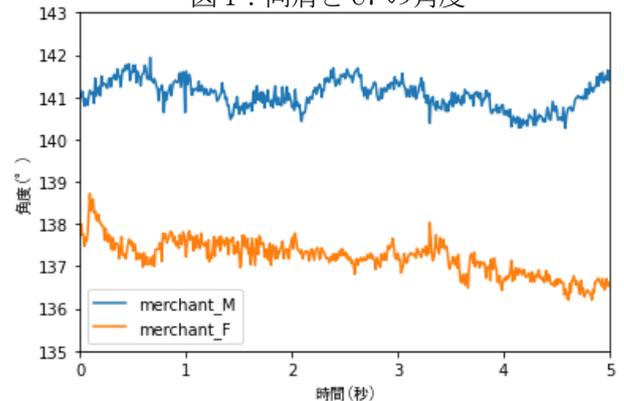
その後、表で整理したインタビューデータを解釈し量的指標を作成し、それぞれについてグラフを作成した。以下のグラフでは断りがない限り町人男性(立役)と町人女性(女形)について比較したものとする。

3-3-1 基本姿勢に関する指標作成とグラフ

女形の基本姿勢については、表1において「操作」に関する言及のそれぞれについて検討する。また、結果においてはひとつひとつに「印象」の言及がないとしたが、直接的な言及がない一方で、前提として「女性らしく見える」という「印象」が含意されているということに留意する必要がある。

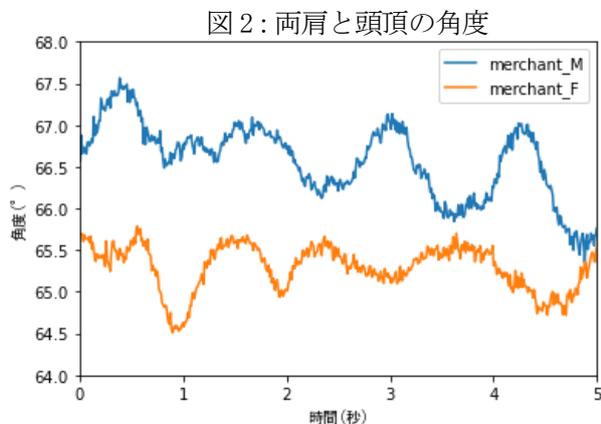
まず、「肩甲骨を後ろに寄せる」という「操作」については、肩峰の位置の変化に着目できると考えられ、xz平面における右肩峰、C7、左肩峰の角度を考え、作成したグラフが図1である。これに着目すると、立役と女形で角度に3~4度程度の差があるものの、肩峰のマーカーはC7よりも前方にあると捉えられることから、肩峰が後ろに寄っていけば、女形でより180°に近づくと考えられるため、本指標ではこの「操作」を十全に説明できていないと考えられる。

図1: 両肩とC7の角度

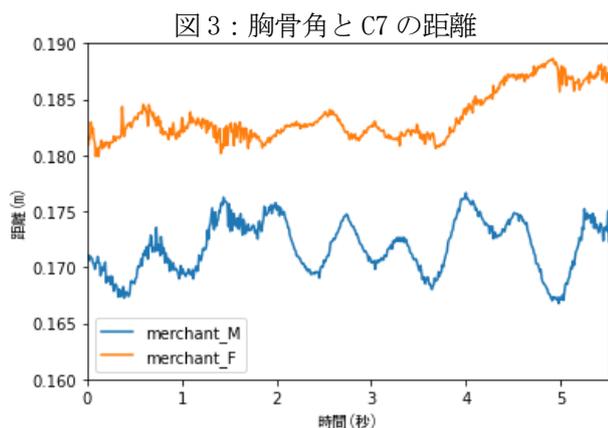


次に、「撫で肩にする」という「効果」について考えると、背景として前述した「肩甲骨を後ろに寄せる」と「肩を下げる」ことで肩のラインが下がって見えるようにするため、肩の位置を通常歩行時よりも下げることを意識していると考えられる。よって、この「操作」を評価するために対応するモーションキャプチャデータの分析としてはxy平面における右肩峰、頭頂、左肩

峰からなる角度となり、作成したグラフが図2である。これに着目すると、女形の方が立役より1.5~2度程度角度が小さく、肩甲骨を後方で寄せて下げるほど本指標は鋭角に近づくと予想できることから、女形においてより角度を下げてしていると解釈できる。

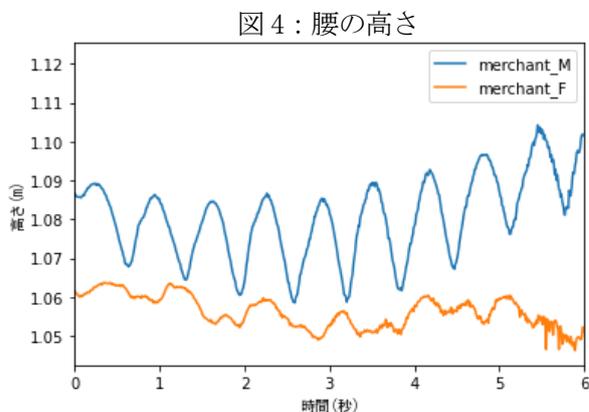


そして、「胸も張る」という「操作」について考えると、「胸も張る」ことによって女性の乳房のような「効果」が現れるとしている。胸に該当するマーカーとして胸骨角を用いたため、位置の変化しにくいC7のz軸における距離を用いて、前後方向における胸骨角とC7の距離を指標と考えることができ、作成したグラフが図3である。これに着目すると、女形の方が立役に比して胸骨角とC7の距離が1cm程度長いと読み取ることができる。一方で、この差が出た要因として、モーションキャプチャスーツの着用によるゆるみの可能性も存在することについては留意する必要がある。



最後に、「腰を落とす」という「操作」について考える。まず、この「操作」による直接的な影響として、仙骨付近に貼ったマーカーによる鉛直方向の高さについて検討することができ、これを比較したものが図4である。これに着目すると、女形の方が立役よりも腰の位置が1~3cmほど下がっていることが読み取れる。また、

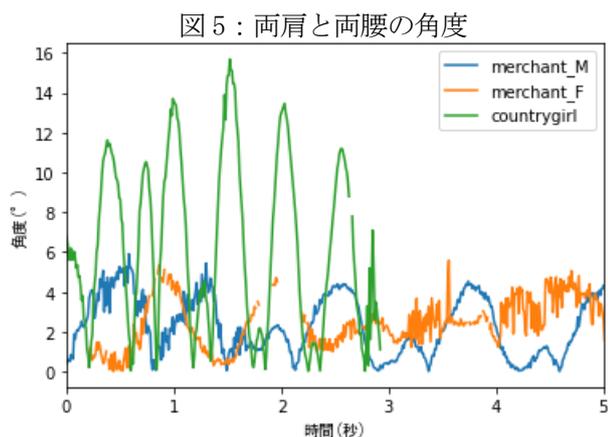
腰の高さの動き方に着目すると、町人男性については規則的に高さ変動しているのに対して、町人女性ではそのような規則的な動きは見られない。この要因としては、女形では表3で記載した「内股をキープする」などのように、足などに別の制約があることから、動きの自由度に制限があるためと考えられる。



3-3-2 振りに関する指標作成とグラフ

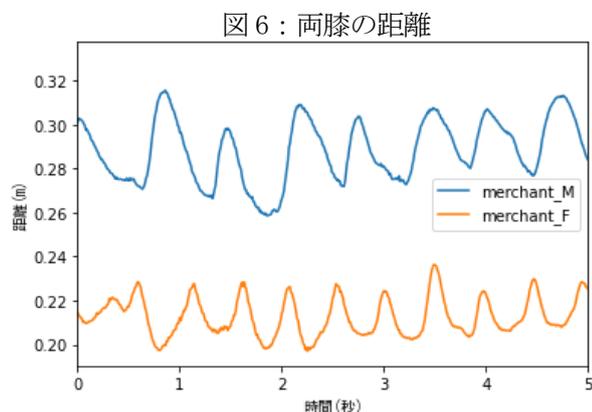
まず、「振る」という動作は、腰を軸に身体を捻ることを指すと考え、その上で表2より、インタビュー中に得られた「振る」ことによる「印象」、さらに表1にて得られた「半身にする」という「操作」に着目すると、「可愛く見える」「シャナリシャナリとして見える」、逆に「真横を向いて歩く」と「色気がない」、「男は斜めに振らない」としている。これらから、「振る」ことによって立役の動作が非常に安定であることに対して、女形の動作が不安定であることを表現し、「色気」が出るなど、女性らしさを演出することができると考えられる。

これを踏まえて、この指標を扱うにあたり、左肩峰から右肩峰へのベクトルと左腸骨稜から右腸骨稜へのベクトルによって得られる角度を用いることで、肩と腰の捻りを表すことができると考えている。これについて、町人男性、町人女性の他に田舎娘を表したグラフが図5である。これに着目すると、両肩と両腰の角度については、通常の歩行時では、むしろ立役の方が大きく角度が出た一方で、安定性は立役の方が高く、女形は時間経過とともに歩行における角度のブレが少なくなっていくように目視で確認できる。一方で、「振る」ことを「やりすぎる」と「品がなくなる」とあるため、「品が悪い」役として、田舎娘と町人女とについても比較すると、「品が悪い」とされた「田舎娘」は「町人女性」より10度ほど角度が大きくなっていると捉えることができる。



3-3-3 内股に関する指標作成とグラフ

表3によれば、「内股」は、内股をキープする、つまり、膝を曲げつつ足を内向きにして歩くという「操作」によって、歩幅が狭くなるという「効果」が得られ、それによって可愛らしい着物を着た女性らしく見えるという「印象」に繋がるとし、膝間距離を指標とした。また、特に、その中で「膝頭が離れない」という「操作」から町人男性と町人女性それぞれの両膝関節外側のマーカ一間の距離を膝間距離として測定し、縦軸を距離、横軸を時間として図示したものが図6である。これに着目すると、女形の方が立役よりも膝間距離が5~10cmほど短くなっており、前述した「膝頭が離れない」という「操作」を反映して短くなっていると考えられる。



4. 考察と課題

今回の実験において、インタビューデータとモーションキャプチャデータとの間で様々な関連が認められたものの、身体のそれぞれの部位は相互に作用していると考えられることから、それぞれの指標がそれぞれの動作を確実に表しているとは限らないことには注意が必要である。

基本姿勢においては、立役と共通する「前を向いて胸を張る」「背筋を伸ばす」という動作に加えて、女形では「肩甲骨を後ろに寄せる」「撫で肩にする」「胸も張る」「腰を落とす」「半身にする」という5つの動作が相互に作用していると考えられる。

「振り」では、身体の捻りを肩と腰の動きが一致していないことであると解釈し、これが「色気」や「不安定さ」を演出すると考察したが、データを用いて確認できなかった。

「内股」では、膝を離さず歩幅を狭く歩く動作によって全体的な動作の小ささが得られ、「可愛らしさ」や「女性らしさ」を表現すると考えられる。また、表3で挙げた2つの「操作」と「歩幅が狭くなる」という「効果」を身体に与える制約として考えると、これらのうち2つを満たすことによって、自ずともうひとつの制約が満たされると考えられる。

以上の議論を踏まえ、本研究では結果・考察の際に着目した基本姿勢、「振り」「内股」の3要素について着目することが可能であり、インタビューの結果を用いて指標作成と仮説形成を目指したものの、得られた指標から論理的に推定できる妥当な仮説を形成することはできず、今後の課題として残った。しかしながら、図4「腰の高さ」や図6「両膝の距離」など、インタビューの結果と一致する指標の作成も存在し、これに限らず今回得られた定性的・定量的データの双方を比較した結果は今後の議論において有用であると考えられる。

5. 今後の展望

本研究を踏まえ、今回取得したデータや追加実験により更なる検討による仮説形成が必要である。その後、より多くの歌舞伎役者からのデータ取得と検証や、それぞれの役の類型における変化や歩行動作に限らない動作における仮説形成・検証が今後必要になると考えられる。また、観客の視点から男女性の認知にアプローチする際の印象評定においても活用できる。

文献

- 齋藤潤(1986). 歌舞伎女形の芸におけるボディラングエイジについての一考察, 舞踊學, 9, 26-27
- 宇津木安来(2019). 日本舞踊における「体幹部」の技法分析および基礎練習法の提案: モーションキャプチャシステムを用いて, 東京藝術大学博士学位論文